平成 30 年度厚生労働科学研究費補助金
（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）
分担研究報告書

11. 小児期の経験が成人期の健康状態に与える影響に関する分析

研究協力者　朱　　祐 珍（京都大学大学院）
研究代表者　近 藤 克 則（国立長寿医療研究センター老年学評価研究部長）

＜要旨＞

神戸市が実施した「市民の健康とくらしの調査」に回答した 20 歳から 64 歳までの 5630 名のデータを用いて、小児期の望ましくない経験の有無と成人期の健康状態の関連に関して分析を行った。年齢あるいは性別の欠測を除外した者のうち、小児期に何らかの望ましくない経験があったのは 3 割程度であった。地区別では、兵庫区と長田区で多かった。小児期の望ましくない経験は、主観的健康観、生活習慣病、三大疾病、ストレス関連疾患、幸福度の全てに関して有意に非保護的な因子であった。一方、部活動、最終学歴、サードプレイスあり、相談できる人がいる、仕事があることなどが小児期の経験の影響を緩和する因子と考えられた。小児期の経験が成人期の身体的および精神的健康状態に関連していることが示唆され、ライフコースを通じた健康格差への介入が望まれる。

神戸市の行った調査に協力して集計・分析を実施した。データの研究への二次利用について神戸市の倫理審査委員会の承認手続き中であるため、神戸市に報告済みの要旨のみ掲載した。神戸市の報告書は巻末の参考資料を参照のこと。